

# 史跡 生目古墳群

——保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅱ——



2 0 0 1

— 崎市教育委員会

## 序

宮崎平野を代表する古墳群である生目古墳群は、昭和18年に国の史跡に指定されました。宮崎市では、昭和51年に『生目古墳群保存管理計画策定書』を作成、また地元でも生目古墳群の公園化を望む声が挙がるなど、その保存と顕彰に向けた動きが活発となりました。

このような中、平成5年に生目史跡公園建設事業が宮崎市制70周年記念事業の一環として取り上げられ、調査の手始めとして生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施しました。さらに、平成9年には『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』が完成、整備事業が本格的に始まることとなりました。

本報告書は、平成11年度に行いました第2次調査の概要報告書であります。平成10年度の第1次調査に引き続き、3号墳・5号墳の調査を行い、また7号墳の調査にも着手しました。5号墳では新たに埴輪が出土するなど、古墳群の成り立ちやその性格が徐々に明らかになりつつあります。本報告書が、古墳研究の一助となり、皆様に活用されることを切に願う次第です。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、ご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言を賜りました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の方々に衷心より感謝申し上げます。

平成13年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

## 例　　言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴う平成11年度発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成11年12月13日～平成12年3月31日までの期間実施した。
3. 発掘調査により出土した遺物及び調査における図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会  
文化振興課 課長 野間 重孝  
文化財係 係長 永井 淳生  
調査事務 主事 竹野 隆司  
調査員 技師 烏枝 誠  
ク ク 稲岡 洋道  
ク ク 宇田川 美和  
ク 嘱託 河野 賢太郎  
補助員 ク 椎 由美子  
ク ク 松永 光雄  
ク ク 小川 正子  
ク ク 久富 なみ

5. 本書の執筆は稻岡が行った。
6. 掲載した図面の実測・製図・図版の作成は烏枝・稻岡・椎・松永・小川が分担して行った。
7. 現場及び遺物写真撮影は烏枝・稻岡・河野が分担して行った。空中撮影は、株式会社スカイサーベイに委託した。
8. 本書の編集は稻岡・久富が行った。

## 本　　文　　目　　次

|                             |   |                             |    |
|-----------------------------|---|-----------------------------|----|
| 第Ⅰ章 生目古墳群の概要 .....          | 1 | 第Ⅲ章 5号墳の調査 .....            | 11 |
| 1. 調査に至る経緯 .....            | 1 | 1. 古墳の概要と平成10年度の調査の状況 ..... | 11 |
| 2. 古墳群の立地と現状 .....          | 1 | 2. 平成11年度の調査の概要 .....       | 11 |
| 第Ⅱ章 3号墳の調査 .....            | 7 | 3. まとめ .....                | 14 |
| 1. 古墳の概要と平成10年度の調査の状況 ..... | 7 | 第Ⅳ章 7号墳の調査 .....            | 16 |
| 2. 平成11年度の調査の概要 .....       | 7 | 1. 古墳の概要と平成10年度の調査の状況 ..... | 16 |
| 3. まとめ .....                | 8 | 2. 平成11年度の調査の概要 .....       | 16 |

# 第Ⅰ章 生目古墳群の概要

## 1.調査に至る経緯

生目古墳群は昭和18年9月8日に国の指定を受けた。指定当時は前方後円墳7基、円墳36基の計43基の古墳が存在したが、昭和36~38年にかけて行われた上ノ迫土地改良事業により、一部の古墳が削平され、消滅及び形状が変化した。また改良事業中の昭和37年には古墳標石、道標石、説明板の設置等の整備が行われている。

昭和50、51年には国庫補助事業で、航空測量による地形図及び『生目古墳群保存管理計画策定書』が作成され、昭和57年には古墳群約14haを対象とした境界点測量を実施している。

平成5年には「宮崎市制70周年記念事業」の一環として(仮称)宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が取り上げられ、平成5~7年度にかけて国庫補助事業で、生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施した。

平成8年7月には委員15名より構成される生目古墳群史跡公園整備委員会が発足、基本構想・基本計画策定にあたり、計5回の委員会を開催、平成9年度末に『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』をまとめた。

平成9年度からは土地の公有化を開始、9、10年度には丘陵南東部に立地する石ノ迫第2遺跡の調査を実施し、平成10年度には国庫補助を受けて史跡整備に伴う発掘調査を3~6号墳、旧14号墳より開始した。

## 2.古墳群の立地と現状

生目古墳群は大淀川下流右岸、宮崎市跡江地区に位置する東西約1.2km、南北約1.2kmの長靴の形を呈した丘陵上に立地している。丘陵上は東側からは宮崎市街地が一望でき、西側からは晴れた日には霧島連山を遠望できる。丘陵は北西側と南西側では形状が異なっており、北西側は最高点44.4mを測る急峻で複雑な地形を呈しており、南側には枝状に小丘陵が伸び、丘陵間の開析谷には溜池が造られている。南東側は標高25~30mの比較的平坦な地形を呈しており、古墳群の大半はその南東側の丘陵に立地する。丘陵全域は照葉樹林地でシイ、カシ林となっており、それらに混ざってスギが植林され、一部に竹林がみられる。また古墳群が所在する周辺は事業開始前は畑地、ココスヤシの苗圃として利用されていた。

古墳群は現在跡江丘陵上に前方後円墳7基、円墳20基、丘陵下に2基の計29基の高塚古墳が所在し、その他、発掘調査等により確認された円墳7基、横穴墓9基、地下式横穴墓14基により構成される。丘陵上に造営された高塚古墳及び地下式横穴墓のうち、1、2、旧2~4号墳、地下式横穴墓の6基は、跡江丘陵北側に谷を挟んで対峙する独立丘陵(最高点37m)に立地する。また横穴墓は、1号墳前面部南側側面に5基、3号墳後円部西側の崖裾に4基構築されている。跡江丘陵下には2基の円墳が微高地に立地している。また、現古墳番号は1~23号(20号は欠番)までの22基の古墳にのみ付してあり、指定時の番号とは異なる。

古墳群の史跡指定以前の資料としては、昭和16年に原田仁により100m級の大型前方後円墳である1・3・22号墳の実測図が作成されており、また地元には戦前に作成された古墳案内略図（徳地一作図）が存在し、この絵図には台地上に前方後円墳8基、円墳30基が記されている。

昭和49年には、前年に破壊された3号墳後円部西側の4基の横穴墓の追跡調査が行われ、須恵器、土師器、貝釧、耳環、馬具類（轡、貝製雲珠）、鉄鎌、刀子等が出土した。

昭和58年には丘陵下の城平地区に所在する41号墳の確認調査を実施。調査の結果、径5m、高さ1.5mの円墳であることが確認され、幅50cmの周溝が巡ることも確認された。

平成5～7年の生目古墳群周辺遺跡発掘調査では前方後円墳である5・14・22号墳周囲の調査では墳丘から転落した葺石が検出され、22号墳前方部西側裾からは、壺形埴輪片が出土した。また、所在不明となっていた旧2～4号墳、旧15号墳周囲の調査を行い、その位置を確認した。その他、地下式横穴墓が8基、土坑墓が6基検出されている。弥生時代の遺構としては、13号墳南側、17号墳西側から円形周溝墓が検出され、丘陵東南部の畠地西側斜面からは弥生時代中期のV字溝が検出され、環濠集落の存在が確認された。

平成8年には宮崎大学考古学研究室により3・5・7・14・22・23号墳の前方後円墳6基とその周辺の円墳の詳細な墳丘測量図が作成された。

平成9・10年には石ノ迫第2遺跡の調査が行われ、この調査は平成7年度に確認された環濠集落の環濠内側の居住域に該当する。結果、弥生時代中期と後期後葉の集落が確認され、竪穴住居35軒、竪穴状遺構20基、土坑33基が検出され、集落廃絶後には土坑墓43基が構築される。また、墳丘削平により所在不明となっていた国指定旧39・40号墳の周溝を確認した他、新たに中期から後期にかけての円墳4基が検出され、うち3基は地下式横穴墓を埋葬主体としていた。地下式横穴墓は計5基が検出されている。

平成10年からは整備に伴う発掘調査を開始。3～6、旧14号墳の各所にトレンチを設定した。調査の結果、3号墳で良好な状態で葺石が検出された他、3号墳東側周堤の外側で地下式横穴墓が、5号墳西側周堤で土坑墓が検出されている。



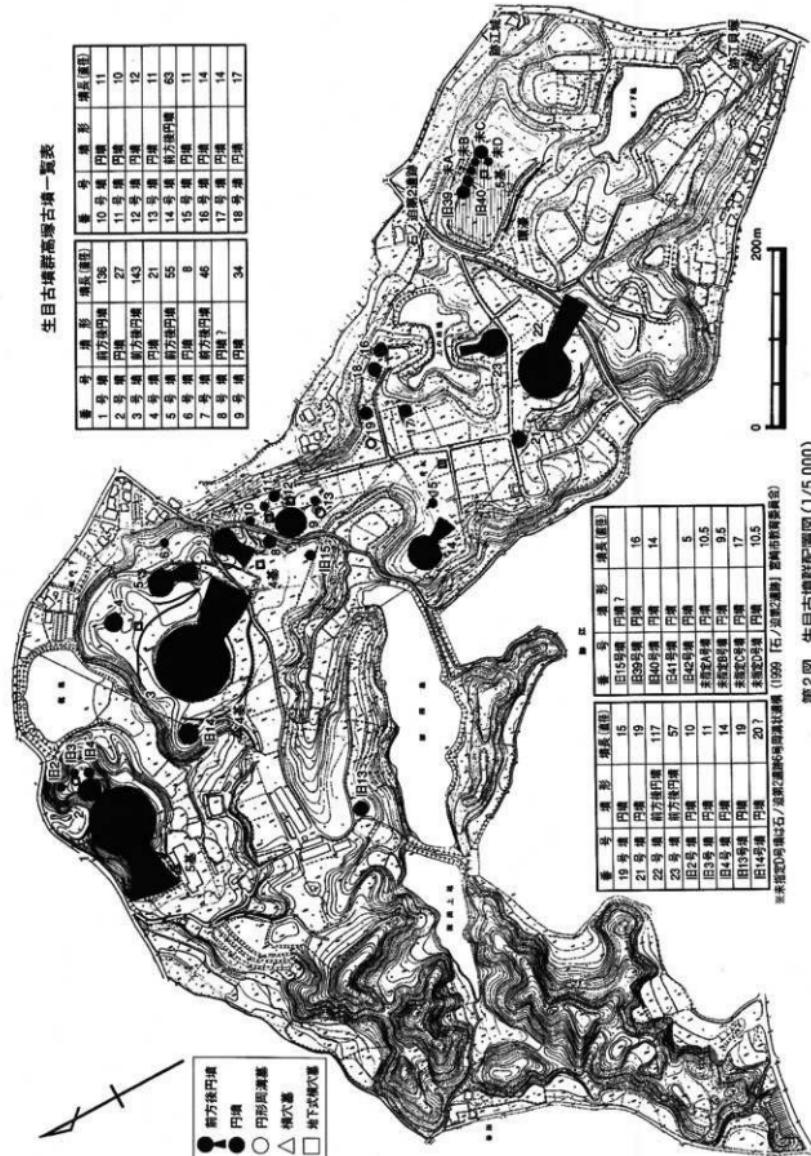
図版1 生目古墳群全景（南西上空より）



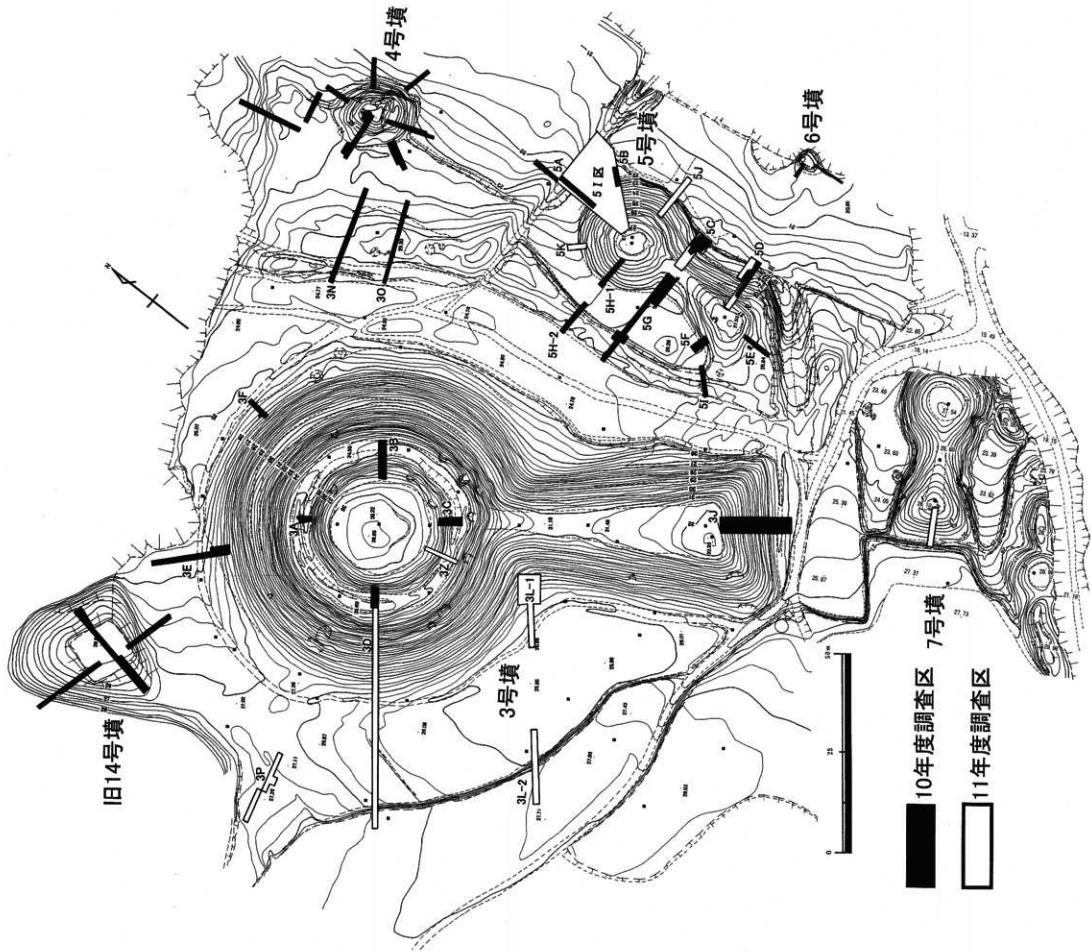
第1図 生目古墳群位置図(1/100,000)

生目古墳群高塚古墳一覽表

| 番号 | 地名 | 地點(通称) | 地形   | 場所(通称) |
|----|----|--------|------|--------|
| 1号 | 地  | 前方円墳   | 10号地 | 円墳     |
| 2号 | 地  | 円墳     | 11号地 | 円墳     |
| 3号 | 地  | 前方後円墳  | 12号地 | 円墳     |
| 4号 | 地  | 円墳     | 13号地 | 地      |
| 5号 | 地  | 前方円墳   | 14号地 | 前方圓墳   |
| 6号 | 地  | 円墳     | 15号地 | 円墳     |
| 7号 | 地  | 前方後円墳  | 16号地 | 円墳     |
| 8号 | 地  | 円墳?    | 17号地 | 円墳     |
| 9号 | 地  | 円墳     | 18号地 | 円墳     |
|    |    |        |      | 17     |



第2図 生目古墳群配図 (1/5,000)



第3図 平成10年度、11年度調査区図(1,000)

## 第II章 3号墳の調査

### 1.古墳の概要と平成10年度の調査の状況

古墳群最大の前方後円墳で、前方部を南東に向かって、丘陵平坦面北端に立地する。規模は、現況で墳長143m、後円部径88m、高さ12.7m、前方部幅42m、高さ6.5m、前方部長59m、くびれ部幅36mを測る。後円部は3段築成であるが、2段目の平坦面が幅3~5mと広く、3段目は径35m、高さ3m程度の円形土壇状になる。墳丘の周囲には、幅20~25m程度の前方部隅角付近で収束する馬蹄形の周溝が巡り、墳丘東側には周堤とみられる土星状の高まりが10~15m幅で残る。墳丘は前方部両隅角が削られてい  
る他は良好な状態で残る。



図版2 3号墳(西上空より)

10年度は後円部上の円形壇、後円部北側、

前方部前面、東側周堤に9つのトレーナーを設定した。後円部上の円形壇に設定した3A~3Dでは墳丘(葺石面)を切って、各トレーナーにおいて幅3.5~4.2m、深さ1.6~3.0mの断面V字形の溝が検出され、溝状造構の埋土中から糸切底の土師器の壺の小片が出土している。後円部北側、前方部前面に設けた3E、3F、3Jは何れも墳端を検出しておらず、良好な状態で葺石が残る。径25~40cm程度の砂岩円礫を横位に据えた根石が検出されている。3E、3Fでは基底部幅3.0~3.5m、高さ0.6m、3Jでは幅1.3mほどの基壇状造構が検出され、上部には敷石帶がみられる。また、3Jは築造当時の状況が良好な状態で確認でき、前方部は2段築成で、幅1.2mのテラスを持ち、基壇状造構同様、小礫を前面に敷く。東側周堤に設定した3N、3Oトレーナーでは幅15m程度、高さ0.5~0.9mの地山削り出しの周堤が検出された。また3Oで確認された周堤の外側(東側)では地下式横穴墓が検出され、竪坑から3号

墳とは反対の東側に向け玄室を設け、玄室は平入り梢円形プランを呈する。遺物は出土していない。

### 2.平成11年度の調査の概要

今回の調査は古墳の西側に集中してトレーナーを設定した。3Dトレーナーは10年度に後円部円形壇周囲テラスに設定した4本のトレーナーの内、主軸に直交する西側のトレーナーを今年度は周溝の外側立上り部分までさらに延長した。墳丘の築造状況確認と周溝状況確認を目的とする。調



図版3 3D(西より)

査の結果、墳丘側では後円部3段築成であることが確認された。特に、現況で確認できる円形壇周囲テラス(10年度の調査でV字溝が検出)より約1.3m下った位置で本来の2段目と3段目間のテラスが検出されたことが注目され、現況で確認できる円形壇周囲テラスはV字溝が埋没して出来たテラスであることが判明した。葺石は各段において裾から約1/3程度残存しているが、1、2段目は自然作用により転落したものと考えられ、3段目では後世に構築されたV字溝によって墳丘盛土を含めて削平されている。墳端部分では明確な根石の確認はできなかったものの基底部幅2.7m、高さ0.7mの基壇が検出され、上面には小円礫が敷き詰められる。

また、2段目裾、3段目裾には根石が確認され、テラス部分には前方部前面のテラス同様小円礫を敷き詰める。墳丘の傾斜勾配は1段目が約25°、2段目が29°、3段目が27°となる。周溝は現況で確認できる周溝の外側の立上りより1.0m墳丘側の位置で若干の立上りが確認され、周溝幅27.6m、深さ60cmを測る。西側の一段高くなる部分にトレンチの延長を試みたが、果樹耕作のため土地の削平、攪乱が著しく、周堤の痕跡を確認することは出来なかった。遺物は出土していない。

3L-1は西側くびれ部の築造状況確認のためのトレンチである。調査の結果良好な状態で葺石が残存し、墳端には径20~45cmの根石が配置されている。

また、墳端に設定した他のトレンチ同様、幅2.7mの上面に小円礫を敷き詰める基壇状遺構が確認された。上面には墳丘に向かって縦に配置される径15~25cmの円礫により構成される区画列石が確認でき、この列石はそのまま墳丘に向かって伸びている。また、基壇状遺構平坦面の先端部分にも根石様に列石がみられ、後円部墳端、前方部前面墳端よりも丁寧に作り上げられている状況が窺える。遺物は出土していない。



図版4 3L-1(西より)

3L-2は周溝、周堤確認のためのトレンチで、3L-1の延長線上に設定した。調査の結果、3D同様

の結果となり、現況で確認できる周溝の外側の立上りより1.1m墳丘側の位置で若干の周溝の立上りが確認された。西側の一段高くなる部分にトレンチの延長を試みたが、果樹耕作のため土地の削平、攪乱が著しく、周堤の痕跡を確認することは出来なかった。遺物は出土していない。

3Pは周溝確認のためのトレンチである。調査の結果、攪乱、削平が著しく、北側の谷に向かって下る傾斜の落ちは確認できたが、周溝の立上り等、古墳築造に伴う土地の整形は確認できなかった。

3Zは現況で3号墳円形壇周囲テラスが認められず墳頂部から緩やかに傾斜する位置に設定した。その結果、周囲テラスに認められたV字溝は認められず、この部分だけ土橋状に残されたことが確認された。しかし、造成は墳丘面を削って行われており、葺石面はトレンチ南側で僅かに残存するだけである。

### 3.まとめ

3号墳では10年度に引き続き葺石が良好な遺存であり、葺き方も一様に丁寧であり、後円部テラス、基壇



図版5 3L-2(西より)



図版6 3Z(墳頂付近より)

上についても小円礎を敷き詰めていることが明らかとなった。また、西側周溝は現況で見てとれる外側の立上りより本来は若干内側になることが分かった。西側周堤については果樹畠開墾のため大きく地形が変えられており、その存在を明らかにすることが出来ず、また、この果樹畠は3号墳周溝西側の一段高い位置全体に営まれており、今後、3号墳の西側の周堤の有無を確認することは難しい状況となってきた。

後円部上に存在する円形壇とその周囲のテラスが、10年度の調査でテラス部分で中世にV字溝(薬研堀)が掘り込まれたことは確認されたものの、果たして古墳築造当初の地形を利用してつくられたか否か、つまりは円形壇と周囲テラスが古墳そのものの施設であるかどうかという結論は10年度の調査では確認することが出来なかった。しかし、11年度に行われた3Dの西側へのトレンチ拡張により、本来の後円部2段目と3段目間のテラスが確認されたことにより、円形壇と周囲テラスは古墳そのものの施設ではないことが判明した。これらのことと整理すると古墳築造後、中世の時期に後円部3段目の中位の周囲を巡る薬研堀が掘り込まれ、溝の内側壁として残ったものが現状で見てとれる円形壇となり、溝内に土が堆積してしまったものが円形壇周囲テラスである。また、今年度の調査では薬研堀が巡らない土橋状に残る部分が確認されたことにより、後円部墳頂部に山城もしくは陣に伴う施設が構築されていた可能性がいっそう強まった。



図版7 3P南東側



図版8 3D後円部側(西より)



図版9 3D後内部3段目基底部



図版10 3D墳端付近



図版11 3D周溝外側立上り(北より)



図版12 3L-1くびれ部前方部側(北より)



図版13 3L-1くびれ部後内部側(東より)



図版14 3L-1くびれ部後内部側(西より)



図版15 3L-2周溝外側立上り(北より)



図版16 3Z葺石(南より)

### 第三章 5号墳の調査

#### 1.古墳の概要と平成10年度の調査の状況

3号墳前方部東側、丘陵東側縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳の東側は開墾により削平され、特に前方部隅角は著しい。規模は、現状で墳長54m、後円部径29m、高さ4.4m、前方部幅24m、高さ4.5m、前方部長26m、くびれ部幅12mを測る。墳丘の北側から西側にかけては、幅8m程度の周溝が巡り、その外側には西側のみ周堤状の高まりが確認できる。

10年度は墳丘の周囲各所に11箇所のトレチを設定した。後円部に設定した5A、5B、5H-1ではいずれのトレチからも葺石、周溝が検出されたが葺石の残存は悪く、葺き方も丁寧さがみられない。墳端は5A、5H-1で確認され、5

Aでは基底部幅2.0m、高さ0.3mの地山整形による基壇状造構が確認された。くびれ部に設定した5C、5Gでは葺石が良好な状態で確認され、5Cでは根石と思われる石列が、5Gでは葺石の区画が確認された。また5Gでは周溝、周堤の調査も併せて行い、墳端付近から土師器の壺が出土している。また西側周堤上からは主軸方向を南北に持ち、2段に掘られる土坑墓が検出され、刀子が出土している。前方部に設定した5D、5E、5Fは5Eでは墳端が確認できたが、他では明確な墳端は確認されなかった。また、5D、5Eでは葺石が検出されたが、根石は確認されていない。周堤確認のために設定した5H-2、5Iでは地山整形によって周堤が構築されており、基底部幅4.4~5.0m、高さ0.55~0.75mを測る。

#### 2.平成11年度の調査の概要

11年度は後円部、くびれ部、前方部東側を中心とトレチを設定した。

5I区は10年度に主軸の北側の延長上に設定した5Aと5Aの東側に設定した5Bを繋ぐ形で後円部墳頂から周溝部分を面的な調査を行った。後円部築造状況確認と周溝の形態確認のための調査区である。調査の結果、後円部は2段築成であることが確認された。葺石は残存するものの10年度の調査で確認されたくびれ部に残存する葺石と比較すると散在的な印象を受ける。また標高



図版17 5号墳(上空より)



図版18 5I区(北より)

24.5m付近でテラスが巡る。墳端はトレンチ西半分で検出されたものの古墳構築後に掘り込まれた墳端に平行に巡る溝や昭和38年に建てられた古墳標石によって、明確に墳端と捉えられたのは僅かである。根石は確認されなかった。また、墳端と同じ範囲で地山整形による基壇状遺構が確認され、基底部幅2.0m、高さ0.3mを測る。周溝部分はトレンチ北側で東西に巡る掘削幅2.8~4.3m、掘削深65~135cm、路面幅2.8~4.3mの道路状遺構が検出され、路面は東から西に向かって上がる。埋土には高原スコリアが混入しており、同埋土の溝状遺構が周溝部分を斜めに横切って道路状遺構に合流する。この道路状遺構は平面測量図にも認められ、丘陵麓の家の登り口として現在でも利用されている。また、トレンチ東側では最大幅8.7m、最大深85cmの高原スコリア混入土を埋土とする土坑が検出され、墳丘、周溝を大きく削っている。当初、竪穴住居の可能性も考えられたが遺物、柱穴は確認されなかった。本調査区においては墳頂平坦面、墳丘面において転落した葺石に混ざり埴輪片が多数出土しており、2段目に分布が集中していることから、墳頂部からの転落と考えられる。

5Cは10年度にくびれ部端部付近に設定したトレンチをくびれ部築造状況確認のために頂部まで延長した。調査の結果、前方部東側は2段築成であることが確認された。標高24.5m付近でテラスが巡る。1段目は葺石が良好に残存するものの2段目は良い状態とは言えず、根石もみられなかった。遺物は埴輪片が転落した葺石に混ざり数点出土している。

5Dは10年度に前方部東側に墳端確認のため設定したトレンチを前方部築造状況確認のため墳頂部まで延長し、10年度に確認できなかった墳端を確認するために北側にトレンチの拡幅を行った。調査の結果、5C同様、前方部が2段築成であることが確認され、標高24.5m付近でテラスが巡ることが確認された。墳頂付近では擾乱が著しく、一様の平坦面の確認は出来たもののそれが本来の姿か否かについては保留するものとする。墳端部分は今年度もラインを検出することは出来ず、根石の確認も出来なかった。

5Jは主軸に直交する後円部東側に後円部中位から墳端が推定される位置（後円部東側は開墾の際に大きく削平されており、崖状に切り立つ）までトレンチを設定した。後円部東側の築造状況確認と墳端の確認を目的とする。調査の結果、5I区同様、後円部は2段築成であることが確認され、標高24.3m付近で傾斜変換する位置でテラスが巡るものと考えられる。葺石は1段目には残存しておらず、2段目では残存するが



図版19 5C(東より)



図版20 5D(東より)

根石は確認されなかった。また、2段目下位の覆土内からやや大きめの円筒埴輪片(1)が数点出土しており、墳頂部から転落したものと考えられる。墳端部はアカホヤ土以下のローム土まで掘削が行われており、検出することは出来なかった。

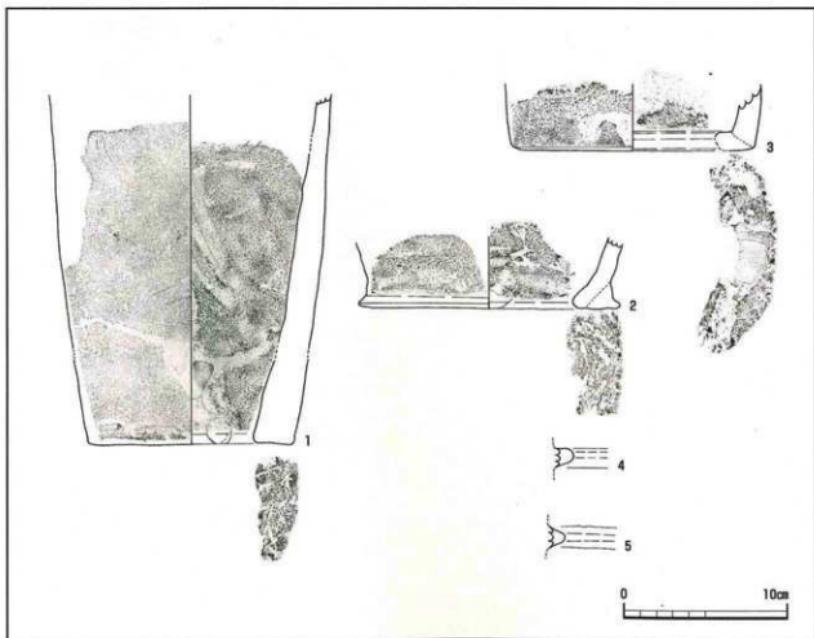
5Kは5I区で一部しか明確にすることが出来なかった墳端のラインを検出するために5I区のやや西側に設定した。調査の結果、根石、葺石共に確認されず、明確な墳端の確認は出来なかった。



図版21 5 J(東より)



図版22 5 K(北西より)



第4図 5号墳出土遺物(1/3)

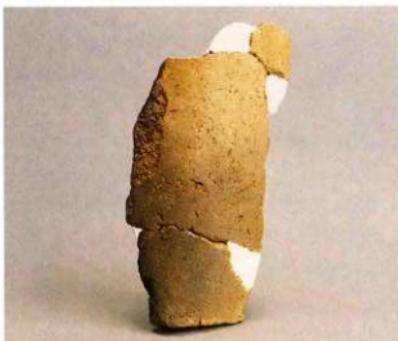
### 3.まとめ

今回の5号墳の調査では5I区、5C、5Dから埴輪片が出土している。多くが小破片で接合できるものが少なかった。形態の読み取れる資料としては5J出土の円筒埴輪がある(1)。内外面ともにナデで調整され、特に外面は丁寧にナデ上げられる。スカシ孔、突帯はみられない。底部は肥厚し、底部から上位に向かいやすや開いていく。また、破片最上位には赤彩がみられる。

また、5I区、5Jからは断面半円形埴輪の突帯が出土している。底部はいくつかのバリエーションがみられ、2は底部端部の外面に粘土帯を貼り付け、内外面はナデ調整をおこなう(5C出土)、3は底部端部の内面に粘土帯を貼り付け、内外面はナデ調整をおこない、外面には赤彩がみられる(5J出土)。推定底径は1が12.0cm、2が16.0cm、3が15.0cmを測る。

今回の調査で出土した主要な埴輪を掲載したが、内外面の最終調整がナデであることや突帯が小さく半円形であることなど特異な形態であることから、現段階で時期の想定は控えておく。

後円部、前方部東側は2段築成であることが明らかになった。葺石は残存しているものの、根石が確認出来たのは10年度のくびれ部東側の墳端のみで、他では確認されていない。葺石の葺き方についても3号墳と比較すると些か雑な印象を受け、面的な調査を行った5I区でも根石の確認は出来ず、良好な状態ではなかった。5号墳周辺の平面測量図で確認出来る開墾による掘削の状況は前方部東側隅角と後円部東側だけであるが、調査の結果、この部分だけが削平されているわけではないようである。開墾をおこなった時期は埋土状況から大きく2時期あるようで、新しくは、後円部東側を大きく削り取った時期で表土の直下でアカホヤ火山灰やアカホヤ下のローム土が検出されるため、それ程古いものとは考えられず、一番有力な時期は昭和36~38年に行われた上ノ迫土地改良事業であろう。また、もう一つの時期は5I区などで確認されている高原スコリア混入土を埋土とする遺構である。この高原スコリアは3号墳円形埴輪周囲で検出された薬研堀の埋土中にも含まれており、3号墳後円部で推定される山城もしくは陣跡に近い時期のものと考えられる。また、5号墳前方部東側の墳端のラインが明確に検出されないものこの混入土が堆積した時に掘削が行われたためだと考えられ、5号墳前方部東側は更なる調査が必要となる。



図版23 出土遺物(1)



図版24 出土遺物(4,5)



図版25 5 I 区後内部(北西より)



図版26 5 I 区後内部テラス付近(東より)



図版27 5 I 区後内部1段目(西より)



図版28 5 I 区道路状遺構(西より)



図版29 5 C 蓋石検出状況(東より)



図版30 5 D 蓋石検出状況(東より)



図版31 5 J 蓋石検出状況(東より)



図版32 5 J 円筒埴輪(1)出土状況

## 第IV章 7号墳の調査

### 1.古墳の概要と平成10年度の調査の状況

3号墳前方部南側、台地縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳は西から東へ下る傾斜地に立地し、主軸を東西方向に持つ。古墳の後円部、北側周溝を掘削状に造られている道によって大きく削られている。古墳の規模は現況で墳長46m、後円部径24m、高さ3.9m、前方部幅24m、高さ4.4m、前方部長22m、くびれ部幅16mを測る。墳丘両側面には、幅3~15m程度の周溝が巡り、現況では前方部前面側は不明となっている。また、後円部南側周溝内には島状の高まりが見られる。調査前は周辺に雑木が繁茂していたが、調査に伴い、墳丘上、周溝内の樹木はすべて伐採した。



図版33 7号墳(上空より)

### 2.平成11年度の調査の概要

トレンチは前方部築造状況確認のために墳頂部から墳端にかけて主軸のラインに平行に設定した。調査の結果、葺石の残存することは確認されたものの、調査期間の制約があったため段築の確認、墳端の確認に至らなかった。しかし、墳端部分については覆土が現段階で150cm堆積しており、現況の平面図で確認できるラインより西側に広がる可能性が考えられ、7号墳西側の畠地を開墾する際に畠地を広げるため7号墳前方部前面まで土盛したものと考えられる。



図版34 7号トレンチ(西より)



図版35 7号墳(北西より)



図版36 11年度調査区（北西より）



図版37 5号墳（北東上空より）

# 報告書抄録

| ふりがな              | しせき いきめこふんぐん                                  |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
|-------------------|---|--------------------|--------------------|-------------------|------------------------------|----------------------------------|--------------|
| 書名                | 史跡 生目古墳群                                      |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| 副書名               | 保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅱ                             |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| 巻次                |   |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| シリーズ名             | 宮崎市文化財調査報告書                                   |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| シリーズ番号            | 第46集  |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| 編著者名              | 稻岡 洋道   |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| 編集機関              | 宮崎市教育委員会                                      |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| 所在地               | 〒880-0805 宮崎県宮崎市橋通東1丁目14番20号 TEL(0985)25-2111 |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| 発行年月日             | 2001年3月31日                                    |                    |                    |                   |                              |                                  |              |
| ふりがな<br>所収遺跡名     | ふりがな<br>所在地                                   | コード<br>市町村<br>遺跡番号 | 北緯<br>付            | 東経<br>近           | 調査期間<br>19991213<br>20000331 | 調査面積<br>(m <sup>2</sup> )<br>438 | 調査原因<br>保存整備 |
| いきめこふんぐん<br>生目古墳群 | みやざきけんみやざきし<br>宮崎県宮崎市<br>おおだて<br>大字跡江         | 45201              | 31° 56' 54"<br>付   | 131° 23' 15"<br>近 |                              |                                  |              |
| 所収遺跡名             | 種別  | 主な時代               | 主な遺構               | 主な遺物              | 特記事項                         |                                  |              |
| 生目古墳群             | 古墳群   | 古墳時代               | 3号墳—葺石、基壇状遺構、周溝    |                   |                              |                                  |              |
|                   |   |                    | 5号墳—葺石、基壇状遺構、周溝    | 円筒埴輪、器種不明埴輪       |                              |                                  |              |
|                   |   |                    | 7号墳—葺石             |                   |                              |                                  |              |
|                   |   | 中世以降               | 道路状遺構、溝状遺構、土坑(51区) | 土師器片              |                              |                                  |              |

# **史跡 生目古墳群**

**保存整備事業 発掘調査概要報告書Ⅱ**

2001年3月

**発行 宮崎市教育委員会**